岩手医科大学教養部研究年報 第41号 (2006), 51-68.

ローベルト・ゲルンハルトの「シャンスとしての病い」

渡 部 貞 昭

(受付 2006年10月30日)

はじめに

作家，詩人，漫画家にして線描画家のローベルト・ゲルンハルトが2006年6月30日に亡くなったことが報じられた．享年68歳である．死因は「重病」の結果であったと報道の多くは伝えている．それはその1996年の心臓手術や2002年のガン治療と無関係ではなかったであろう．つい本年の『シュピーゲル』9号で，笑いについて脳を研究する医学者のBarbara Wildとの同誌の対談に応じて発言していただけに突然の死の印象が強い[1]．

数多くの追悼の文がネット上や，新聞や『タイタニック』，『コンクレート』をはじめとする雑誌に見られた．故人を悼む言葉は得てして故人にたいする賛辞が美化，修辞化される嫌いがあるが，他方では故人の業績を出来るかぎりその生涯，その業績を俯瞰して，現時点で可能なかぎりの詩人の全体像を提出しようとする書き手である批評家，記者たちの努力のあとがそこに見えなくもない． ゲルンハルトへの追悼には，「国民詩人」であるとか，すでに「古典的詩人」であるとか，その作品が生む笑いは「理性的笑い」であるとか，その文学は奇しくも純文学と娯楽文学とを止揚しているといった評価が捧げられている．ゲルンハルトはその読者を変えることによって世界を変えたという．その笑いは「非理性を笑う理性の笑い」「自己自身を笑う笑い」であったという．あるいは彼の詩のあるものはトイレの壁によく書き付けられ，また大学のゼミで取り上げられ，これほどの影響力の大きさを「戦後ドイツの著者のなかで達成したものはほとんどいない」という賞賛もある[2]．

筆者は，ゲルンハルトの属する「新フランクフルト学派」に始まり，その滑稽の技法や表現構造に研究の関心を向けてきた[3]．その流れからして，その死を耳にして，ゲルンハルトの滑稽にたいする姿勢や身振りが，心筋梗塞の手術やガンとの闘を経験してその晩年において，どう展開しているのか，どう変わっているのか，といった興味を禁じえない．

ゲルンハルトは，2004年にそのガンとの闘病の体験を『K詩』の中の一章「シャンスとしての病い」の連作詩に加工した．世に病床日記，闘病日記，それに類する作品，記録は多いが，しかし，すべて詩によって作品化されているのは稀であろうし，滑稽化されるのも稀であろう．本論では，特にこの連作詩を中心に『K詩』の分析，評価を試みる．

1．

今回多くの追悼記事が出たおかげで，同時にゲルンハルトに関する新たな伝記的事実が少しく増した．まずそれらを補足しつつその生涯の歩みの概略を確かめ，病気の治療の経緯を確認しておこう．ローベルト・ゲルンハルトは，1937年エストニアのタリン(旧レバル) に生まれる．2年後一家はポズナンに移住．法律家であった父は戦死した．戦後8歳のとき，母親，他の二人の兄弟とともにドイツ

岩手医科大学 教養部 ドイツ語

へ逃げ，最終的にゲッチンゲンに落ち着いた．ゲルンハルトは1956年からシュトゥットガルトやベルリンの大学で絵画，ゲルマニスティクを学ぶ．彼を有名にしたのは，K.F. ヴェヒターやF.W. ベルンシュタインとともに担当した『パルドン』誌の“Welt im Spiegel”欄の多彩な表現である．同欄に11年掲載の漫画「シュヌッフィ」などは，ゲルンハルトのユーモアの傾向，弱者で忘却される目立たない存在に寄せる心，疑わしい権威への当てこすり等が見てとれる．いわゆる「新フランクフルト学派」の名称は，最初は，1983年のこのメンバーの有名な３羽ガラス，ゲルンハルト，ベルンシュタイン，ヴェヒターの共同展覧会につけられたものであり，それが急速にグループ全体の名称となった．1980年代にはベルント・アイラート，ペーター・クノルと一緒に有名なお笑い芸人オットー・ヴァールケスの本やその映画を製作している．

人間ゲルンハルトは「快楽主義者」であって，人生を，よきワインを，よき食事を愛した，という．70年代からイタリア，トスカナ州のアレッソの近くに家を持ち，そこで１年のうちの４ヶ月は過ごしていた．ゲルンハルトは80年代，90年代から詩人として著名になっていった．詩形式も，ブルース，クプレー，連祷詩，バラード，対話詩，テルツィーネ，ソネットと豊かに採用されている．

詩作がその活動の中心を占めるようなっている時期，心筋梗塞が発見されて1996年にバイパス手術を受け，さらに2002年に大腸と肝臓の手術の治療を受けることになった．そして，この２回の治療体験が詩的加工され，それぞれ1996年の『窮地の心臓』（Herz in Not）として，2004年の「シャンス（Shangse）としての病い」を収める『K 詩』（K-Gedichte）として刊行されたのである[4]．

前者の1996年の手術は，『窮地の心臓』のゲルンハルトの自注によれば，同年の５月15日に，心電図の検査の結果，できる限り早く入院するように言われ，心臓手術を受けることになった．最初フランクフルト・アム・マインのザクセンハウゼン病院に入院し，そこでバート・ナウハイム医院への手術受け入れを待機し，そこへ転院して手術を実施している．手術は６月10日に行われ，同月26日に退院した．ゲルンハルトは入院直後に一種の入院日誌をつけ始める[5]．それは報告形態をとった，無韻の七行詩であった．数は100編に及ぶ．

後者2002年の治療の大まかな時系列的経過は，本連作詩から判断すれば次のようになろう．ゲルンハルトは2004年の初めの数ヶ月にかけてガンの診断を聞かされたようであるが，詩集に最初に出てくる日付は，「４月21日」で第15番目の詩篇「読書の後に」という表題を付けている[6]．これによりガンに関する本を読んで知識を得たことが分かる．次に「５月５日」にフランクフルトの病院で「化学療法の開始」を見る．「８月７日」は「狂気」の表題が化学療法の妄想と身体の暑さを示唆し，「８月８日」は引き続き「化学と狂気」の表題が熱と化学療養の影響の競合を表現している．この後に示される治療の日付は，トスカナに移り，「９月３日」に「第１回トスカナ療法」が開始され，以後，同治療が毎週ごとに，９月10日に第２回，９月17日に第３回，９月24日に第４回，10月１日に第４（ママ）回が為されている．10月１日はイタリアを襲った停電の日であった．さらに，10月８日に第５回，11月７日に「最終第６回トスカナ療法」を体験する．その都度「３度十字を切る」ような，化学療法を耐え抜き，12月12日にCTスキャンの検査を受けて治療の成果を確認したのであった．

2．

ゲルンハルトが2002年に公刊した詩集『K 詩』の「K 詩」とは，ドイツ語の単語のKで始まるテーマ，第１章の「シャンスとしての病い」の「病」（Krankheit），第２章の「まやかし（Shwindle）としての戦争」の「戦争」（Krieg），第３章の「料理長としての芸術」の「料理長」（Küchenmeister）の最初の文字をとって名づけた，単にKで始まる語がテーマの詩の意である．第１章は，詳論を後述にまつが，50編の詩から成る．

第2章は，7編のソネットを収めるが，それは，ドイツのテレビ放送局ARDの文学番組『印刷したて』（Druckfrisch）の依頼で創作しアクチュアルなものをテーマにしている．それらは国連による大量破壊兵器の査察の後，その根拠もなく2003年3月19日に開始されたイラク戦争を扱い，言及する状況に関する台詞つきの連作詩となっている．

この第2章の連作詩の表題が「まやかしとしての戦争」（Krieg als Shwindle）となっているのは，一つには先行する連作詩「シャンスとしての病い」の表題にたいする〈異同原理〉に基づく同化処置であるし，その原題のドイツ語がSchwindelからShwindleに変じているのは，いわば「まやかし」が「まやかじ」に訛っているとも言うべき異化処置である．この意図的な処置は後述の「シャンスとしての病い」のSchangseのフランス語化の場合と同様に，その言語の共示性を利用した英語化であると判断される．それが示唆するものは，戦争のまやかしを演じる米英の主導性であろう．すでに連作詩の表題において詩人の身振りが予告されているのである．連作詩の1例を示せば，第4の詩篇の「米国の報道官がイラクの子に戦争を説明する試みのソネット」は，その台詞に「3月上旬．初春に突然，米空軍が『ショックと畏怖』（Shock and Awe）のバグダット爆撃を始める」とあるような状況を背景に，次のように詠われる．

坊や，われわれは君を自由にしたいのだ
それには先に坊やを撃たねばならない
坊やはこれが自由という植物に水をやることだと
分かるのなら，坊やはわれわれをゆるすだろうよ

坊や，すべての爆弾の母がやってくる
坊やにあったら，個人的なことと思うなよ
坊やが彼女にあったら和解の挨拶しておくれ
虫歯は穴をあけてはじめて充填ができるのだよ

それはね，坊やの町を破壊するのは
もっと立派にしようとしてなのだ
坊やが命じられたことをするならばね

坊やはじきに自由の王国を見るだろう
まだ疑ってるの？ 何も聞かずに信頼していいのだよ
坊やを撃つものは，坊やを騙す必要がないのだから(7)

「すべての爆弾の母」（Mother of All Bombs）は，大規模爆風爆弾兵器（MOAB）の俗称である．通常兵器として史上最大の破壊力をもつ爆弾であり，実際は使用されなかったがイラク戦争に実戦配備された．詩に無辜の形象として子供を選んだ理由は，このおぞましい俗称をイローニッシュに詩化するためであろう．米国の報道担当官は，現下の戦争を正当化するのに自由，再建設，融和といった大義を掲げるが，実際の局面における個々の市民にとってのその開戦の真実が，各詩節において的確に辛辣なる皮肉，風刺，嘲笑，ブラックユーモアとなって示される．自由を育てるために人を殺すのであり，互いに融和しあうために爆撃するのであり，言われたとおりにしていれば爆撃の結果は再建につながるというのであり，攻撃する相手にはその攻撃の理由を納得させる必要はない，と言っている

のである．これらの虚言の破廉恥性にたいする詩的加工は，ソネットの使用によって効果的に達成されている．すなわち，その伝統的詩形の喚起する快適な抒情性や整然とした古典性にあからさまなまやかしの言説が結びつくことによってズレが生起して対象の〈キャンセル〉を生み，皮肉や嘲笑を惹起するのである．これはすでにゲルンハルトにとって試用検査済みの試みであった．その「イタリア起源の最も知られた詩形を批判する材料」では次のように表現して笑いをさそったのであるから．「ソネットはひどくきたないものだと思う/実にせせこましく冷ややかでとにかく良くない/正直鬱陶しい話だ/ソネットを書く者がいるとは，今日まだ//鈍色の糞の山を築く勇気のある者がいるとは」（Sonette find ich sowas beschissen, /so eng, rigide, irgendwie nicht gut ; /es macht mich ehrlich richtig krank zu wissen, /daß wer Sonette schreibt. Daß wer den Mut // hat, heute noch so'n dumpfen Scheiß zu bauen ; ）[8]

各ソネットは台詞から読み取れば次のような状況に関連している．詩篇の表題と台詞に示される状況を――上に論じた(5)に相当する詩篇は略し――時間順にあげ，詩それ自身のコメントを加える[9]．(1)「若い米国と年寄りの欧州のソネット」の詩篇が言及するのは，2003年1月上旬ごろ，一方に予防戦争の準備を始めた米国を中心とする勢力があり，他方，武器査察による平和的解決をもとめる国連を中心とした欧州諸国が存在するなか，ラムズフェルドがこれらの国を「彼らは年寄りの欧州に属している」と評した時期である．詩は言う，「敵が戦争ゲームによく加わらずとも/戦争になることは神と決定しこと/撃つ者がなければ撃ち返えすなり」．(2)「ブッシュ・パウエル・ラムズフェルドの不発ではない罪作り」の詩篇の言及は，2月上旬に関連する．この時期米国のパウエル外務長官が国連安全保障理事会で――1年後疑わしき事実によるものと訂正することになるが，――イラクが大量破壊兵器を有していると宣言した．また，米国の武器査察団の大量破壊兵器の存在を裏付ける根拠がないという報告に，米国政府は，それは巧妙に武器を隠していることを証明するにすぎないと反論する．「ならず者が黙るもわれらの警告が先なり/また騒がしき者を訴えるすべての権利あり/何も聞かずともすべての証人たれり」．(3)「弱がりと強がりのソネット」は2月下旬に言及．この時期，CDU委員長のアンゲラ・メルケルが米国を訪問し，『ワシントン・ポスト』紙上でドイツ政府の戦争拒否の姿勢を非難する．「その女を男勝りに行動させるは何か/よく聞けよ，それは平和のホモ女役/メルケルを心にメイキすべきなり」．(4)「ジョージ・W．ブッシュによる神への祈りのソネット」の言及は3月上旬．この時，36時間以内にサダム・フセインが国外退去しなければ攻撃を開始するとするブッシュ大統領の最後通告が出た．「主よ，汝に禁じるよう祈るなり/戦争の最後の隠れ家の封鎖を/汝をやわらかき神に格下げする者は/殺戮の神の吾を忘るべからず」．(5)「米国の報道官がイラクの子に戦争を説明する試みのソネット」（前述参照）．(6)「独裁者除去のソネット」の言及は4月上旬．イラクが米軍によって占領される．しかしフセインは12月14日になって逮捕される．「戦の初めの命令は断頭なるも/失敗せり，悪人は逃亡せり/吾これを報道の森から察知するも/そは日に日に干からび葉を失えり」．(7)「戦争という教師のソネット」の言及は5月上旬．5月2日にブッシュ大統領が戦闘行動の終了を告げる．しかし，この後どうなったかといえば，続く数ヶ月に銃撃や暗殺で死んだ米兵の数が公式戦の死者よりも多くなった．その上，イラクに破壊力が無いことをすでに4ヶ月まえの最終報告で確認していることをブリックス国連査察委員長は10月3日に認めた．「こうした戦争はひとを賢くする/何を我々はクルド人，バース党，ペシュメルガ，スンニー派について知っていたか/何をモスル，ティクリット，シーア派については知っていたか/日々ますます利口になる前に」．確かに戦争ははるか昔より人間に知をもたらしてきた．ある知を除いては確かにそうである．

3.

第3章の「料理長としての芸術」は，詩ではない．言わば連作詩成立の事情を吐露した詩人による自己解題にもなっている．このテキストの冒頭でゲルンハルトは「何が文芸を養うのか，安寧なのかそれとも災厄なのか」，「苦や死は詩人にとって何なのか」と問う[10]．もし，それが文芸を養う「食物の発見」であるなら，その厨房はどこなのか，その「料理場の料理長」は痩せ男なのかが問題になるというのである．というのもドイツの慣用句では，食うや食わずの状況は，そこでは「痩せ男（Schmalhans）が料理長（Küchenmeister）だ」と言うからである．

ここでの自己解題は，詩作厨房の内輪話といった言説になっている．この文芸にたいする問いの身振りは，つまり，痩せ男の状況にある「料理長としての芸術」は，『ハノーヴァーリッシェ・アルゲマイネ』紙上の書評における Martin Halter の批評にたいして示されたものであった．ハルターは，ゲルンハルトが重い手術の後にその『窮地の心臓』を披露した時その軽快な調子のもとに死にいたる重い息を感じたが，そうこうするあいだに65歳の彼の心臓は再び至極健康になっていて，ゲルンハルトの「はかなさとむなしさ」に関する考えは「生存に関わる感情というよりはむしろ紋きりに現れているようだ」と，その健康状態を知ることもなく無頓着な意見を述べた[11]．上のゲルンハルトの身振りはこのことにたいするゲルンハルト独特の回答であった．つまり，自分の反論を実際はこうなのだと，直接的に相手に向ける言葉をつむぎだすのではなく，その対応が文学的に加工された自ら自作の成立を語るテキストとなっている．

ここに言及された事項は，「シャンスとしての病い」の詩篇創作の動機，この連作詩と『窮地の心臓』との相違点，非常に苦しんだ化学療法について本人の『ブルンネン』ノートに記した事柄，本作品を献呈した，ガンを病んでいたものの手術を受ける間もなく亡くなった友人のミュージシャンのフォルカー・クリーゲルのこと，創作刺激をうけた，ガンに罹りガンを詠った英国の生物学者の J.B.S. ホールデンの詩の紹介，「まやかしとしての戦争」の成立事情である．

さらに，そこには他のテーマで放送用に創作したものの放送が実現しなかった時事ソネットの「批評家誕生のソネット」（SONETT VON DER GEBURT EINES KRITIKERS）や「世代間闘争のソネット」（SONETT VOM KAMPF DER GENERATIONEN）を採録し，最後に，ポジティブなテーマの「明るい厨房光景」（REINE HEITERE KÜCHENSZENE）の詩篇でもってまとめとしている．これは，詩人が滑稽化の手法としてよく見せる〈スカシ〉の一種である[12]．詩人の演出に従ってその詩篇を読み続けてきた読者にたいし，そのいったいどこに「ポジティブな K」があるのかという問いを先取りして，自分の作業場を示すのである．「厨房の光景」においては，次のように同じく〈異同原理〉に従って K で始まるチーズ（Käse）の語が「おろす」（reiben）/「おろし」（Reibe）の語でもって Käsereibe（「チーズおろし」），Käse reibe（「チーズをおろす」） reibe Käse（「チーズをおろす」），Reibekäse（「おろしチーズ」）というように巧みになされた押韻とその内容の陳腐さとが他の K のテーマが示唆する真剣のコントラストとがズレをなして，滑稽を生んでいる．

REINE HEITERE KÜCHENSZENE

Liebste, reich die Käsereibe,
Auf daß ich den Käse reibe,
Liebling, schau: Ich reibe Käse.
Was das wird, Schatz ? Reibekäse ! [13]

4.

「シャンスとしての病い」の詩作の元となる腸と肝臓の手術がフランクフルト大学付属病院で行われたのは，上のハルターの評論の発表から2週間もたってない時期であった．ゲルンハルトによればその体験を前のバイパス手術の体験と比較してみようという気になった．どちらの場合も，術前は健康を感じていた．どちらの場合もやがて真理の瞬間を前に「はかなさやむなしさ」を語る詩篇が蓄積したのである．両者の体験から下すゲルンハルトの結論は，「生きるものより詩作するものが賢明である」ということであった[14]．この言葉は，治療で経験することを表現するのはさまざまに可能であるが，そのまま直接的に体験を話したり書いたりすることよりも直接表現を加工したもの，詩作が真実を伝える，というように理解できる．

ゲルンハルトの両者の体験は，前者は繰り返されることはなかったが，後者は一回かぎりのものではなかった．苦痛を伴う化学療法がドイツとイタリアで繰り返されたのである．それに病いの治癒は不確かであった．これについては，ゲルンハルトの記録帳ともいうべき『ブルンネンノート』に次のように記されている．「人生が旅として理解されるなら，病気は，通り越すことが肝要な地域であり，その際，最初は何が旅人を待ち構えているのか不確かである．短期間の旅か．戻ることのない旅か[15]」

この時詩人はすでに「心臓という半島」を横断し，今や「ガンという大陸」に接近しようとしていた．前者は，すでに1996年に病院日誌の体裁で『窮地の心臓』に作品化したが，後者は，ガンの手術とその治療の体験が詩に表現されることになる．それは前述のごとく最初からまとめるつもりで書かれたのでなく，書き留めたものがたまっていた．そこから，それぞれの報告形式が不統一であるが，50編からなる作品にまとまって「シャンスとしての病い」は成立したのである．

「現実的」でない「料理人長としての芸術」の産物である「シャンスとしての病い」の連作詩の題目は Krankheit als Schangse（下線は筆者）であるが，なぜ病いが「シャンス」なのであろうか．連作詩の中にあっては最初，20番の詩篇「チャンスとしての病い（KRANKHEIT ALS CHANCE）—今日ズボンを買う際」において「Chance」の語が登場する．これが後の38番の「一度勝者，いつも勝者」になると意図的に Schangse に変えられ，下に見るように，このままに引用されている．「合うズボンがなければ/ズボン買いは実に嫌なもの」と切り出して，17対の2行詩節を連ねる20番の詩篇の言うところに従えば，「チャンスとしての病い」の示唆する意味は，治療の化学物質によって目や腹の快楽を奪われるものの同時に欲望が去る結果ズボンは合うものになるということである．とすればこの病いに，スリムをもたらしズボン買いに不快な思いもせずに済むといった可能性があることになるが，しかし，「回りから皆の声がする/『お客さん，良さそうですよ』//だからガンには腹をたてず/寛大に考えなさい//『僕はスリム，世界は丸い/病気の者のみ健康に生きる』」という部分に，病気にたいする周囲の姿勢へのイロニーの表出は明瞭である[16]．

連作詩38番の「一度勝者，いつも勝者」の対話詩は，これを，「ツール・ドゥ・フランス」（Tour de Frangse）の「フランス」に押韻して，「君のテーゼの『シャンスとしての病い』」を引用する．

A：ランス・アームストロングはガンに勝ち
　つぎに5度ツール・ドゥ・フランスを走りきる
　勝利者として．彼は君のテーゼの
　「病いはシャンス」の証しでないか

B：ガンは難題
　おそらく僕に凌げよう

だが，このツール僕にはとうてい
—5回はもとより—やれはせぬ[17]」

ランス・アームストロング（1971～）はガンを克服して，世界最大の自転車レースのツール・ドゥ・フランスの連続優勝者となったことで著名である．このキャンサー・サバイバーは1996年に精巣腫瘍がすでに脳と肺に転移し，生存率50パーセントとも言われていた．数年間におよぶ闘病生活を経て選手生活に復帰し，1999年から2005年まで（上の詩では「5年」であるが）連続7年の前人未踏の記録を打ち立てた．彼はナイキと契約しLivestrongプロジェクトでガン患者支援のために黄色のリストバンドの発売を始め，この種の流行を生んでいる．このツール・ドゥ・フランスは，9名編成で21チームが参加し，3週間走りぬく過酷なものであり，個人タイムトライアル，山岳ステージの記録が総合優勝に大きく影響する．

この詩がユーモラスであるのは，次のような心的メカニズムの結果であろう．超人的なアームストロングの業績にたいして，見せかけのテーゼの「病いはシャンス」が押韻によって示唆する同一性の期待，同じようなものが実現するといった期待が生まれるが，「難題」(harter Nuss)を「凌ぐ」(knacken)のコノーテーションがデノテーションの「固い胡桃を割る」行為の容易なイメージに代わることによって，非常な困難と容易さのコントラストに変じる．そこから一抹の滑稽味が生じている．

以上のように見てくると，本連作詩において「シャンスとしての病い」という場合，まず「帽子買い」のように，ある事柄が実現するのに「病いがチャンスである」ような状況，本来個人にとってさまざまに生じる可能性（Chance）を出発点として，さらには上の「一度勝者，いつも勝者」のように，言わば〈神話化〉された可能性（Schangse）の意で用いていると判断できる．そうした意味では，スーザン・ゾンタクの「隠喩としての病い」に近いものがある[18]．

5．

「シャンスとしての病い」は，以上のような製作の場「厨房」と病いの体験にたいする身振りを条件として，「診断はガン，あるいはすべて大丈夫」に始まり，「良き結末のための真に良き助言」で終わる50編の詩篇から成立している．それらの詩形は，ソネット，対話詩，4行詩，2連4行詩，3連4行詩，4連4行詩，8行詩，2連8行詩，等々と多様であり，内容的には特に化学療法の体験をテーマにした詩編が多い．順を追って表題をあげれば，次の通りである．

「診断はガン，あるいはすべて大丈夫」，「病名を聞いた後」，「綱渡り師」，「何も持たざる者」，「その1週前」，「良き助言」，「切ると苦しむと」，「痛みの治療」，「患者の悪霊」，「出会い」，「フランクフルト・アム・マイン・ヨハンヴォルフガング・フォン・ゲーテ大学付属病院の朝食」，「衰弱の歌」，「病いに良いもの」，「4月21日，読書の後」，「短いニュース」，「邂逅あるいは死人のウォーキング」，「化学療法の知らせ，あるいはのんきな3人組」，「化学療法は語る」，「5月5日，化学療法の開始」，「チャンスとしての病い—今日ズボンを買う際」，「6月7日，振り返りと見通し」，「3人の友」，「前と後」，「詩人さんの日，あるいは良き日々の思い出」，「ぼくを相手にせずに」，「8月7日，狂気」，「8月8日，化学と狂気」，「2つの療法」，「警告」，「鏡の前」，「シンデレラのための子守唄」，「鏡の前のヨブ」，「9月3日，第1回トスカナ療法」，「かごの中の雄鶏」，「2002/2003，1年の回顧」，「例の教え（EXEMPLA DOCENT）」，「9月10日，第2回トスカナ療法」，「1度勝者，いつも勝者」，「ハチクイの侵入」，「9月17日，第3回トスカナ療法」，「9月24日，第4回トスカナ療法」，「確かさ」，「10月1日，第4回トスカナ療法」，「聖フランシスコへの大いなる呼びかけ」，「10月4日の朝の美しき眺め」，「10月8日，第5回トスカナ療法」，「11月7日，第6回最終トスカナ療法」，「12月12日，CT」，「状態判

断」,「良き結末のための真に良き助言」. すべて, 詩人の治療の体験に間接, 直接に関係したテーマである.

冒頭の「診断はガン, あるいは万事大丈夫」の詩篇は次のように語る.

最初は航行中にあの急な
止まれの威嚇射撃だった
それ以前は馬鹿だった
それ以降利口になった

次は古典的になされた
商館への打撃だ
これ以降前よりも
利口になった

こんな電撃的に利口な (blitzklug)
男が何らかの死によって
どうにかなるとは
考えられない[19]

ガンの告知の有無は洋の東西で異なる. ドイツでは告知することを常としている. もとより「神なき者」としてのゲルンハルトにとり, 告知それ自体を拒否する姿勢はない. 表題の「診断はガン, あるいは万事大丈夫」(DIAGNOSE KREBS oder ALLES WIRD GUT) は, oder をはさんでの二つの表現の話者が同一であれ, 異なるにしろ, 詩人の引用であると解することができる. しかし「ガン」は具体的なガンの名を挙げず特定されていない. その限りで, この「ガン」は社会的意味をもった「シャンスとして病い」である. 後者の Alles wird gut「すべてよくなる」は「万事大丈夫」とか,「何の心配もないよ」といった慰めの常用表現である. これが「あるいは」の語を介して,「診断はガン」と並列されている. その意味作用は必ずしも一様ではない. 因みに, ドイツの著名なテレビ・ジャーナリストの Nina Ruge が担当の ZDF の番組 LEUTE HEUTE を毎回この言葉で終えることで, あるいは視聴者の神経を苛立たせることで注目を集めてきた[20]. この言葉の使用は, 世界の悪しき趨勢にもかかわらず陽気にあるいはシニカルに使用されている. ひとは, テロ, 地球温暖化, エイズ, 過剰人口, 麻薬問題, 種の絶滅等々と世界のネガティブな側面を知らないわけではない. それでも「万事大丈夫」といつも口に出ている. そうした使用環境にある言葉の引用である.

第1節は詩人の最初のバイパス, 第2節はガンの診断を示唆している. それぞれ突然の出来事だった. それが慣用句の Schuß vor den Bug, Schlag ins Kontor で比喩されている. 前者は用意に想像できる光景だが, 後者の由来は, 一説にキュッパーの『日常語辞典』によれば,「商売上の痛い損失」から生まれたとしているが, その本来意味するところは, ドゥーデンの『大ドイツ語辞典』によれば, 建物への落雷のように見える事件である[21]. どちらも晴天の霹靂のごとき突発性を語る. そして事態を告げられたものは, それを積極的に承知する, すなわち「利口」になる. それが第3節になると, 出来事の突発性, 電撃性が出来事を承知する電撃的理解 (blitzklug) に反転して滑稽味を生む. もとよりこれは言葉の遊びであるが, 換言すれば詩人のいう「支え足」「(Standbein) と「遊び足」(Spielbein) の詩的加工がなされた一つの詩篇が「立像」(Standbild) として言わば詩的治癒として成立している[22].

ここにはガンの発生という深刻な事態が以上の言葉の仕掛けによって，精神の不快な現実による拘束がなく一瞬解放されているのだと言えよう．

このように冒頭の詩篇が示唆するように，各詩篇は，ゲルンハルトにおける闘病の局面，「旅の個々の停留地」の行動に関する，愁訴することなき，ユーモア，サーカズム，反抗による詩的克服である．その際，上に見るように，従来の形式的な〈異同原理〉の手法は放棄されていない．更なる例を示せば，手術における医師と患者の関係は，「切ると苦しむと」において次のように詩的加工される．「ひとりは言う，切ら（schneiden）ねばならない/他は知っている，苦しま（leiden）ねばならない//ひとりは言う，さあ手術（Schnitt）だ/他は考える，さあつらい目にあう（macht ... mit）ぞ//ひとりは切り出し（rausgeschnitten）/他は耐え抜いた（ausgelitten）//ひとりは別れる人（der Scheidende）/他は苦しむ人（der Leidende）//ひとりは切る人（der Schneidende）だった/他は苦しむ人（der Leidende）のままだった」[23]．医師の行動でもなければ患者の行動でもなく，両者の関係が韻を踏んで滑稽に示されている．

患者にとり，ガンの恐怖や不安の克服は難しい．詩人とて例外ではない．欧米の病気観にはあたかもデーモンのように人々を襲い，襲われた人びとのなかで乱暴狼藉が働くことによって病いが引き起こされるといった考えがある[24]．詩人はこの形象を用いる．詩「患者のデーモン」の「デーモン」（悪霊）は病める詩人の苦痛，恐怖，苦境を具現する形象である．たえず，出現して，いわば詩作の指導的精神（spiritus rector）として機能する．しかし，メランコリーはここでは次のようにほとんど問題となっていない．

「昼はそいつに耐えるものの/夜はそいつが打ち砕く//小さく短くちりぢりに/治療する者だれもなし//朝が来たれば黙然と/夜の破壊を見まわして//起床のラッパのすぐ後に/その整理をしはじめる//砕かれた者の跡形が/半分たりと似ればよし//そいつが昼の患者なり/名もあれば皆が知っている//いかに今後良くなるか/そいつを皆が助け助言する//そいつ耳傾けあくびする/もうじき皆の寝る時間//さあ大ハンマーのいくつも/置きし部屋へ退くぞ//そいつは道具を振って確かめる/今日は小なる物が良いのかな//答えはどうあれ夜の白むまで/また打ち砕きの到来だ//悪意からでなく配慮をもって/昼は昼，夜は夜[25]」

ゲルンハルト自身にとって闘病の個々の苦痛・恐怖の局面は独自の生きる闘いであろう．しかし，ここに哀歌なるものを求めても無駄であるようだ．哀歌的なるものは運命に従うものである．前述のごとく「神なきもの」であるゲルンハルトはデーモンを超えた視線をとる．さらに，病いにあってもゲルンハルトは詩作（Dichtkunst）を人生に従事する生きる仕事と理解し，その成果の滑稽が読者と社会的な関係で成立することを知っている[26]．それ故，「K 詩」はつねに最も親密な近さと距離をとった観察を，もっとも無味乾燥なリアリズムと最たるブラックなユーモアを共存させてどのデーモンも無化するのを可能にする．すなわち，上に見るように，痛みや恐怖を擬人化しデーモンの身振りを真似ることによってそれを超越しているのである．

ゲルンハルトは5月5日に化学療法の開始するにあたって，その治療で用いられる2種類の抗ガン剤の説明を受け，その選択を迫られた．詩篇「化学療法は語る」は，おそらく担当医師のこの両方の説明を受けての反応である．

手にするか髪にするか
選択できる
よく聞けよ

このオクサルプラチン
手や足の
神経を損ねる
この話を記録する
その鉛筆が君の手から
落ちるのだ

このイリノテカン
髪の在り処に
障害引き起こす
今かきむしる
その毛髪が君の手に
残るのだ

さあ選択せよ[27]

上では両抗ガン剤の否定的効果を具体的な形象でいつものごとく対称的に示している．ちなみに「オクサルプラチン」は，フルオロウラシル（5-FU）およびフォリン酸と一緒に欧米で用いられている，細胞維持的に（zystostatisch）に作用する，結腸ガン用の抗ガン剤で，下痢，吐き気，嘔吐，粘膜の炎症，血液像の変化などの副作用があるという．「イリノテカン」は日本で開発されたカンプトテシン誘導体で，ガン細胞のトポイソメラーゼＩを抑制することにより強い抗腫瘍効果を持ち，大腸ガン，肺ガン，子宮頚ガンなどに用いられる．高度の下痢の副作用を示す場合があるという．

詩にあっては，これらの薬効の結果のイメージが決定的な可笑しさをもたらしているのでない．薬の重々しい名前はそれなりの医学的効果性に関し神話的意味作用を持つなかで，薬の積極的な効果を根拠にしてではなくネガティブな根拠から二つのいずれかの選択を迫るところに実現している．

かくして５月５日に，フランクフルトでの化学療法が開始される．「ガン戦士（Krebskrieger）は，ガンになる（kriegen）だけでガンに戦いを挑む（bekriegen）ことがないものは敗者であることを知っている」（Krebskrieger weiß, daß unterliegt, wer Krebs nur kriegt und nicht bekriegt.）と洒落を示し[28]，６月７日の「振り返りと見通し」では，ガンになってこれまでが上手くいっていたこと，これから手術，治療をせねばならないのを受け入れ，８月７日には，「狂気」の表題が示唆するように化学療法の妄想と身体の暑さを表現し，８月８日は引き続き「化学と狂気」の表題であり，熱と化学療養の影響の競合を表現している．

次いでトスカナでの化学療法の詩に入る前に，「２種類の治療法」の詩篇が挿入され，術後補助療法（adjuvant therapy）と緩和療法（palliative therapy）に関する考察が詩的加工として示される．術後補助療法は，医学的文脈からすれば，ガン手術後にガンの再発を予防するために行われる治療方法で，化学療法や放射線療法などが講じられる．つまりガン細胞を切除したとしても確認を逃れたガン細胞の存在の可能性があるから今のうちにその治療で叩いておく処置である．同様に，緩和療法は末期ガン患者にたいし，延命を主眼にせず，QOL を重視し，痛みを和らげる治療を行うとされる．世界保健機構は，「パリアティブ・ケアは，すべての人間の福利にかかわるため，パリアティブ・ケアの実施にあたっては人間として生きることが持つ霊的な（SPIRITUAL）側面を認識し，重視するものである」という[29]．両者は通常の理解では必ずしも対立的なものではない．だが，両者とも医療者にとってと

ガン患者にとってとは，それぞれにその意義が異なってくる．詩人はいつものごとく両者を見る．「病気はつねに治癒をもとめ叫ぶから/人間その治療を考え出した//それはまったく天の恵みかもしれない/でも例外なくそうなのか，あいにく否だ//医師が『補助療法』と言えば/その恵みはまっすぐに壁に架かる//『緩和療法』と言えば/一切の恵みは歪んで架かる//というのもその語の意味は単に/真の治療はないということ//そこから帰結するは/客は生涯患者であること//あまりに早く脱力せぬよう/配慮する医学にとって//命を延ばし苦痛を緩和し/憂鬱を抑え痛みを和らげる――これらすべてまことに社会的/だが結局は致命的//激しく最終戦を闘う最後が的なれば/ますます老いぼれ衰弱し/この地球に徐々にしだいに//まずは居住区/次にホーム，さらにホスピス別れを告げて//そして，死に赴く合図する/つまりは緩和的な沈下なり//ついに再び陸地を見るならば/こんな死神の治療が補助治療[30]」

治療が本来生きながらえることを目指していることを前提とするならば，緩和治療は，患者にとり療法や治療の名に値しないものであろう．それが，病いが切実に治癒をもとめるだけに，何でも治療が案出され，命名され，はては天の恵みとされる．引用の「天の恵み」（ein Segen）は，「一切合切」（der ganze Segen）と語呂合わせになっていて，後者は皮肉に，ある事物が本来よりも過剰に生まれて恵みというより，むしろ迷惑になっている「一切合切」の状態を指している．緩和治療にたいする評価は別として，「命を延ばし苦痛を緩和し/憂鬱を抑え痛みを和らげる」のは死に赴くことへの補助，「死神の補助治療」であるとも言える．最終行は，その最たるイロニー，ブラックユーモアの詩句である．「ついに再び陸地を見るならば」（siehst du endlich wieder Land）も慣用句で，窮境克服の目鼻がつく，トンネルを抜け出るの意で，ながながとケアを受けてみれば，それは死の準備であったということになる．

9月3日に「第1回トスカナ療法」が始まるが，イタリアに到着すると同時に抗ガン剤の点滴「カンポ」が待っている．部屋から美しいキアンティの稜線が目に映るが，「最も美しい稜線（櫛）も何の意味があるのか/髪が無くなる者にとって」と詠い，猛禽の飛翔を目にして「あいつは自分の望むものを知っている/お前はお前の望まぬものを知っている/さあ，いざ進め（avanti）」と詠う[31]．トスカナの病院での化学療法を始めるにあたっての闘志を表明すると同時に，チュウヒの飛翔と光景を対象にその意志を詩的に加工している．9月10日の「第2回トスカナ療法」では，今日の診察の患者は男性ばかりで，だれしも何か病変があること示している．9月17日の「第3回トスカナ療法」では，カンプト注で疲れた目が灰色の新聞の「腫瘍」の記事に釘付けになる．それはアンナ・マグニーニ（1908－1973）の死を扱っているからである．彼女はイタリアの名女優であり，『バラの刺青』に主演し，オスカーも受賞した．詩は，彼女が30年前にローマで前立腺ガンで65歳でなくなったことを記し，「彼女を超えれるだろうか？/どうだいカンプトよ!?」と問いを発している[32]．

9月24日の「第4回トスカナ療法」では，化学療法のトンネルの終わりに達し，好転を感じると同時に暗い未来も感じる．骨髄抑制による白血球の減少が気になっているからである．

10月1日の「第4回トスカナ療法」（ママ）は，全イタリアを襲った停電の日であり，その余波の病院の様子を「停電は停電だけを終わらした」のだとイローニッシュに語っている[33]．

「10月4日の朝の美しき光景」は，1連の連作詩の中でも化学療法から解放される喜びを詠っている点で異質であるが，その詩的表現の身振りはやはり滑稽化を目指している点では一貫している．デノーテーションに洒落のコメントがつく慣用句，あるいは，神にたいする無遠慮な態度の言葉によってその歓喜がユーモラスに表明されている．

「再び知る，自分の持ち物を/再び知る，自分の望むものを/それが分かる者はへたばらない/それを待っている者は静止しない/彼はむしろ叫ぶ//「いや，もうカーブを飛ばし切りそこねない（今日の午

後まっすぐ『コスタ・キアラ』に向かうけれども）/いや，二十日大根を下から眺めない［墓の下に眠らない］/（すぐまもなく上からアンティパスティを眺めるけれども）//いや，草に食いつきはしない［くたばらない］/（ビステッカ・フィオレンティーナがメーンディッシュとして待っているけれども）//いや，スプーンを貸したりしない/（ナイフの代わりに必要だけれども//そう，神様を善人としておこう/（おそかれ早かれ勘定書きをもってくるだろうけれども）[34]」

10月8日の「第5回トスカナ療法」も，いつもと変わらぬ光景の例外として，スズメ蛾の一種の峰雀が窓に向かって飛ぶので窓を開けてやる．「お前は我々の誰とも違う/ブンブン，ヒラヒラ，ズンズン飛ぶもの/蜂雀のままでいろよ」と話かけている[35]．

トスカナ最後の療法「11月7日．第6回にして最終回のトスカナ療法」は次のように詩に加工される．これは，4行詩4節から成り，最初の3節のそれぞれに，予知する伝達にたいする斜字体の言わば被伝達部が付いている．しかも，それは「つまり」（Also）で始まり，3点リーダー（…）の省略府で終わる形式を共有している．この形式的に珍しい処置は他の詩篇には見られない．これはゲルンハルトがしばしば行なっている自作の自己解題の延長に相当するものに理解できなくはない．例えば，第1節では，苦しんで，終了した化学療法にたいする詩人の感慨を述べているが，あたかも4行詩の部分が舌足らずだと判断したのかのように，特に「自分の体験で苦しめることができる」について，その感慨を裏付ける具体的な事情，食餌の間違った選択を次のように弁明のように斜字体部分で補足説明している．

「化学療法をすれば
話す種ができる
周りの世界を日夜
自分の体験で苦しめることができる：

つまり，この化学療法は得てして食欲をなくす．ぼくははじめに間違いをおかして，病院での最初の化学療法の時に朝食について，ノリ状のチーズパン，大きなカップのコーヒを要望し，非常に体調を崩し，数週間ノリ状のパンを考えるだけ嘔吐を催し，他方単にコーヒの臭いを嗅いだだけ…」[36]

第2節は次の通りである．
「化学療法を受ける者には
報告するものがある
一切合財，詩やら歌やら
果てしなき物語やらで：（略）」

ここの被伝達部では主としてドイツとイタリアでの化学療法の受け方の相違が示されている．すなわち，ドイツでは病室のベッドの配置が二つのベッドが向かい合って患者が顔を見合すようになっているが，イタリアでは二つのベッドが前後して，4組並列する匿名方式なっている．これは過小評価すべきでない心理的効果があると言う．

第3節
「化学療法で18回這った者は
そのあと3度十字を切る
それは続く限り苛立つもの
でも後から喜ばせる：

つまり，前提となるのは，当然，その後のCTが前の二つの検査のように，良い所見，つまり陰性（negativ）の所見を提供する場合である．『5－FU，フォリン酸及びイリノテカンからなる，2サイクルの補充的化学療法の後，病気の過程が新たな進行を示すことのないことが目下安定している』というように．この場合，何となく可笑しいのはこの文脈での『陰性の所見』は健康への方向への進展を意味することである．そう，無論さらなる後続の検査CTや結腸検査が残っている．自分の体の内乱の「勝利」を問うなら，約5年間にわたって所見が陰性であってはじめて，ガンにたいし勝利したと言うことができる…と言う」

第4節
「だれが化学療法を語ろうと
それは自分の責任
私の結論？ それは
最高でないがなかなかのもの」

上の被伝達部の追加は，詩そのものの軽快さとそれに応じた享受を考えれば，なくもがなの印象を与える．だが，それでは詩人の伝えたい体験世界は，読者の想像に委ねられ，その実際とは接点をほとんど持ちえぬであろう．その処置は無論読者を意識してのことである．そうなると本詩は単に体験報告だけの印象を強めるように見えるが，そうではない．翻訳では必ずしも伝えることが容易でない言葉遊びが一貫している．「自分の体験で苦しめる」（mit Selbsterlittenem quälen）は，自分の被った痛みで他者を苦しめる関係を可能性と表現することでイロニーにして滑稽である．第2節の「一切合財」（mit Haut und Haar）は慣用句で同時にデノーテション「皮膚と髪」の意味作用が活性化して，化学療法の副作用としての外的症状の発生箇所をも示唆して滑稽であるし，第3節の七転八倒の苦痛と痛みにたいし「3度十字を切って」厄介払いする身振りは距離をおいて見れば何となく滑稽であるし，第4節の慣用句 auf eigene Kappe（「自分の責任で」/「自分の帽子で」）や nichit von Pappe（「なかなかのもの」/「ボール紙製でない」）におけるデノテーションの形象の選択が可笑しさを誘うほどに巧みであり，ここに詩的加工の滑稽化の一貫した身振りを見ることができる．

「シャンスとしての病い」の最後は「良き結末に真に良き助言」の詩篇が占めている．これは，前述のごとく，ガンで死んだ，初めて「クローン」の語を用いたとされる世界的に有名な遺伝学者にして，進化生物学者 J.B.S. ホールデーン（1892－1964）の詩に刺激を受けている．その「ガンはおかしなもの」（1964）の詩は，「ホメロスの声あれば/直腸ガンを詠えしものを/そはトロイ攻略に殺されし数より/実際は遥かに大勢殺すなり」と始まる．詩によれば，ホールデンは血便に気づき友人の医師を訪ね，診察を受ける．硫酸バリウムを注入され内臓の写真を取る．そして次は組織片がとられ検査，答えはガンであった．手術室へ運ばれ新生物が除去される．結腸とリンパ節が患部であった．ホールデンは，「二つの顔のヤヌスのようだ」と洒落る．それは，人工肛門ができて嘆くのではなく，肛門を見ることが可能になった事態のユーモラスな表現，英国流の〈リアリティのキャンセル〉，あるいはリア

リティの無化である.

そして言う,「くたばる前のぼくの最後の言葉は/『ガンはむしろおかしなもの』ということ/看護婦さんやナイ・ベヴァンのおかげで/国民健康保険（NHS）は天国のようだ/腫瘍に直面するに/十分なユーモアのセンスをもつならば/ガンよく人を殺すは知っている/だがそれは自動車も睡眠薬もしかり/またガンは汗かくまでに傷つける/それは虫歯も未払いの借金もまたしかり/多少の笑いがしばしば人の治癒を/加速するは確かなり/だからぼくら患者は本分を尽くそう/外科医たちの治療を助けるために[37]」

この詩に刺激を受けたゲルンハルトの連作詩最後の「良き結末のための真に良き助言」も，前者の72行にたいし64行とほぼ同じ長さで内容も同じ病いの可能性のある読者にたいする助言の体裁となっている．しかし，前者は典型的な英国風のユーモア，窮境に何らかの積極面をあえて見てとる，換言すればやせ我慢の身振りが見えるのにたいし，これは文字どおり,「良き結末に真に良き助言」が示すとおり,「良き結末」であったから「真に」「良き助言」を意図している.

「良くないことが報告されねばならない/腸ガンはすべての階層を襲う/５万人が腸ガンになり/しかも来る年来る年/３万人この病いに倒れる/正直になろうではないか/死んでしまえばほんとにお終い/生きてたほうが賢明だ/そしてそれは不可能でない/もし刃を研ぐ死神の手から/刺す前に短刀が/地に落ちるなら/死神は死体をこえて行くもの/死神のわれらが生きる時間の短縮を/ことばで軟化させるでなく/そは行動で妨ぐべし/今日に明日が続くのならば/肝心なのは予防なり/腸ガンの病いのときに/少し勇気あるを示して/己が腸を毅然として/内視鏡検査にゆだねること/内視鏡検査？旅のようなもの！/ゆっくり静かに光線あてて/内臓深く視線を向けて/悪しき姿も良き姿も伝えるなり/そしてモニターが姿を/医者と機械に紹介する/赤い洞窟,湿った喉口/こちらに結局は無害の/ポリープがあれば,あちらには医師に/疑いを呼び起こす青白き部分あり/カチッツと鉗子で切り取る/サンプル,そしてほどなく/伝える検査室の報告/然り，ここに腫瘍があり/サーッとガンが除去される/だから僕らのまとめは次のもの/命を封印するよりも/腸の内視鏡検査をしたほうが良い/死をこうむるより/ガンを切除するのが賢明だ/健康を失うよりも/治療するのがすばらしい/治療は不快だが/しかしいつも/それがなしでは短い命/そちらのほうがなお悪い/だからぼくは意見する/このスクリーニングを受けるべし/予言者でない者すら/知っている,早きが遅すぎないことは/早期発見がモットーたれ！/確かにこんなガンは籤のよう/だが偶然のせいにされ/偶然重視に偶然襲来なり/だがそれは運命ではない/生命の灯火もゆらめけば/早期に発見する者が/燃え続けることを助けることができる/救助,それは強制達成ではない/でも腸ガンで成功しうる/あらゆる命の努めるものが/すなわち生き続けることが[38]」

この詩篇は，脚韻のあることと,「死神」の形象に多少のユーモラスさを感じるのを別とすれば，韻律もなく先行する各詩篇と異なり，真剣（Ernst）の身振りが際立っている．こうなっているのは，この「真に良き助言」がすでに第６の詩篇「良き助言」の皮肉な，作者通常の身振りにたいする，治療終了後の修正なのである．そこでは，手術を前にして，病院を回避するネガティヴな態度が良い助言の中身である.「おお！人間よ，病院前で止まりたまえ/そこからいつか患者がいなくなれば/君にも手を出すだろう/君はそこでだんだん滞在悪化/それは何か腸の前奏なり/肝臓，静脈，動脈の/手術をしては徐々に暑くなる/そんな病院は休みを知らず/老人や若者を捉え/その胃を，その肺臓を捉え/そのリンパ，その細胞を捉え/隠れた場所も開かれた場所も捉え/心臓も胸も，脳や男根も捉え/そして君を地の下ではなく/活動ゼロへ運ぶ．ゼロから何が生まれるか？/人間よ，病院から遠ざかれ[39]」

確かに，ゲルンハルトの連作詩末尾の「良き結末に真に良き助言」がホールデンの詩と同様に読者にたいする訴えとして機能している．しかし，英国人のあくまでもその事態にことの良き面を見て取るユーモアはない．ユーモアは「絶望から逃亡，辛うじての信頼への救出」（Christopher Fry）という

が，この心的働きは本詩には見られない[40]．むしろ，顕著なのは，例えば，次のように，誰にも自明な，単純な合理的な視点からの理由付けの主張である．「死をこうむるより/ガンを切除するのが賢明だ/健康を失うよりも/治療するのがすばらしい/治療は不快だが/しかしいつも/それがなしでは短い命/そちらのほうがなお悪い」．しかも，この主張が，いつものように，spiegeln に besiegeln, schneiden に erleiden, therapieren に verlieren, Therapie に sie, immer に schlimmer と押韻するので滑稽に響く．確かに，ガンの早期治療を薦める言説を意図したからといって，必ずしもその身振りが Ernstler の硬直したそれになる必要はないであろうし，ガンを病む人々にとってもそうであろう．ゲルンハルトはナルシストではなく読者を常に意識しているのである．

以上を踏まえた上で，特に連作詩「シャンスとしての病い」の特徴は，次のようにまとめることができる．

(1) 本連作詩は，自分の病いのガン治療にかかわる体験の詩的加工を経た報告詩である．詩人にとってその致死の恐れのある病いは，積極的な闘いの対象である．しかしこの病いを取り除くはずの病院，療法，医師は，必ずしもその闘いを無条件に助けるものとして現れているわけではない．患者にとってそれらとの実存的な関係は，科学的医学の要請する関係と必ずしも調和しない．これは，詩にしてはあまりに専門医学的な「オクサルプラチン」と「イリノテカン」の化学療法，adjuvant や pallitativ の療法のモチーフを採用している事実から明らかであろう．

(2) また，「蜂雀」，「ズアオアトリ」，「チュウヒ」，「犬」，「猫」といった生き物の形象は患者としての詩人の感情移入の対象としている点からもこの点は明瞭である．犬は，主人との忠実な関係がガン告知後に考察される対象，猫は慰めをもたらすもの，蜂雀蛾は病室の窓から逃がしてやる対象，チュウヒは疾風のなかを飛翔する元気者，ズアオアトリはその狩猟解禁に際し，聖フランチェスカが守護するキリスト教徒たちがズアオアトリにたいする乱暴な所業を訴える対象である．

(3) とすれば，詩人にとって詩の加工がどのような身振りでいかに具体化され，それが詩人にとって何を意味するかが問題である．「ガンの診断あるいは万事大丈夫」をはじめ，取り上げた詩篇の個々の具体的な分析から明らかなように，多様な詩形を用いながらも，可笑しさを引き出すために表現形式として，あるものの同一性と異性を強調・反復する姿勢の採用が明瞭である．従来の〈異同原理〉の形式的手法，頭韻，韻律，形象の異同，統辞の異同，慣用句のデノテーションとコノテーションの異同が用いられているのである．それらの手法は，言葉でなくともゲルンハルトがその戯画・絵詩で用いた手法である[41]．

(4) 但し，その結果として生まれる可笑しさは，以前に比して，単に滑稽なるものというより，嘲笑，イロニー，ブラック・ユーモアに傾いている．その理由は，モチーフが病苦や死であり，かつまたその主体，その表現者が詩人自身であることによって，その局面を自らユーモアによって〈キャンセル〉する，あるいは優越するという，笑いのメカニズムの一つを言わば稼動しているからだと思われる．それは無論，読者に示された身振りであるが，本来題材的に同苦を呼び起こすものについて「同苦を持たぬ」非共感的な表現方法をとり，嘆きではなく，異同の解消をイロニー，嘲笑，ブラック・ユーモアとして表出している．

(5) 本連作詩は，人生の詩的加工として生を選んでいる．それには，詩人により単に生きることの描写よりも真実を含むと考えられている．それは，そもそも滑稽なるものが〈異同原理〉によって成立することにより，そこにはことの一面的ではなく，両局面を含んだもの存在するということであろう．

ゲルンハルトに特定の〈病気観〉があったとは思われないが，その病気にたいする姿勢は，先述のごとくその詩篇から読み取るかぎり積極的な抵抗である．しかし，それは医学的治療を媒介する．科学的医学の病気観は往々にして「病気の機械的モデル」にしたがい病気を実体化するが，連作詩に見る詩人の主観的抵抗における病気観は，むしろ次のようなナイチンゲールのそれに――神の存在にたいする信仰は異なるにしても――共鳴すると思われる．彼女の〈病気観〉の支持は何も医学者以外のものに限られたわけではない.「病気とは何か？病気は健康を妨げている条件を除去しようとする自然の働きである．それは直そうとする自然の試みである．われわれはその自然の試みを援助しなければならない．病気というもの，いわば形容詞であって，実態をもつ名詞ではない(42)」．患者を〈病気に冒された人間〉と見るのと身体が〈病気と闘っている人間〉と見るのでは病気観が異なる．ゲルンハルトは少なくとも自分の実存的な患者意識で体験する世界を読者にその特異で得意な詩的加工，滑稽化で軽妙に報告したのであった．

しかし，それは同時に自分の治療のためでもあった．スーザン・ソンタグは，かつて自分の乳ガン告知についてつぎのように語った，という.「…ともかくパニックでしたよ．強烈な動物的恐怖というのかな，それを感じました．だけど，その一方で，気分の昂揚する瞬間もあって，とてつもない充実感ね．何か大きな冒険に乗り出したような気分．‥‥最初に思ったのは，こんな目にあうなんて私は何をしたんだろうということ，私は人生を間違えた．自分を抑圧したということ．… (43)」これは，ゲルンハルトの場合の気分と似ている．詩篇の「ガンの告知あるいは万事大丈夫」や「料理長としての芸術」に見る内容は，自分に病気の降りかかる理由が理解できない様であるし，病気の治療を冒険として覚悟しなければならい思いである．彼女は，その『隠喩としての病い』において，致死の病いである結核やガンの神話作用を分析，批判し，むしろこれらの病いの作り上げられたイメージにおびえずに，これらの病気を肉体の病いとして受けとめて医学的治療をうけるべきことを説いた．それは彼女の Selbsttherapeutikum として機能したであろう．しかし，それはゲルンハルトと場合と異なり，自分自身の病いに当事者として言及したものではない．他者の病いに関する言説についての言説である．それは，個々人の実存的な病いに関する態度とは別物である．ゲルンハルトはこれを滑稽化の身振りの言語的錬金術でソンタグの病いの隠喩も支配する世界の治療に反応する道を採ったのである．

注：

（1）Der Spiegel: 9/2006, S.144－148.

（2）http://www. haus-der-literatur. de/newsextra/gernhardt. htm 2006/08/16

（3）渡部貞昭：「新フランクフルト学派」試論（『岩手医科大学教養部研究年報』38号, 104－124），「ローベルト．ゲルンハルトの滑稽に関する覚書」（同39号, 67－87頁），「ローベルト・ゲルンハルトの滑稽技法と笑いのメカニズム」（同40号, 69－88頁）

（4）Gernhardt, Robert: Herz in Not. Frankfurt a.M. 1998

（5）Gernhardt, R.: Die K-Gedichte. Frankfurt a.M. 2004

（6）Ebd. S.24.

（7）Ebd. S.9.

（8）Gernhard, R.: Gesammelte Gedichte. 1954－2004. Frankfurt a.M. 2005, S.109.

（9）Die K-Gedichte. S.70－83.

（10）Ebd. S.87.

（11）Ebd. S.87.

（12）例えば,「私は言った」(ICH SPRACH: Gesammelte Werke. S.51f.),「笑いの歌」(Lied vom Lachen:. S.69), 絵詩の

「毎週変わらじ」(Gerunhardt, R.: Vom Guten, Schönen, Baren. Bildergeschichten und Bildgedichte. München 2001, S.436.）など参照.

(13) Ebd. S.96.

(14) Ebd. S.88.

(15) Ebd. S.88f.

(16) Ebd. S.30f.

(17) Ebd. S.52.

(18) スーザン・ソンタグ（富山太佳夫訳）『隠喩としての病い/エイズとその隠喩』（みすず書房, 1992）によれば, その基本的主張として, 致死の病い, 結核, ガンなどは, その医学的意味に加えて, 社会的なコノテーション, バルトのいう神話作用を持ち, 人々に心理的影響及ぼす, という.

(19) Ebd. S.9.

(20) http://www.nina-ruge.de/awg.swf 2006/09/03

(21) Duden "Das große Wörterbuch der deutschen Sprache" in zehn Bänden. 3. völlig neu bearb. Und erw. Aufl. 1999 Mannheim S.3365. Küpper, H. :Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache Stuttgart 1984 S.2475.

(22) Vgl. den Klappentext von R. Gernhardts Später Spagat, Frankfurt a.M. 2006.

(23) Ebd. S.15.

(24) ウルフ, H.R. 他（梶田昭訳）:『人間と医学』（博品社, 1996）

(25) Ebd. S.17.

(26) ゲルンハルトは, その「滑稽詩に関する10のテーゼ」の第１条と第２条で次のように主張する.「真剣詩と滑稽詩とがある. すでにブレヒトが pontikal な詩と profan な詩の区別をしているが, 同時に両者の路線の統合にも成功している」.「滑稽詩は笑いを狙う. ブレヒトより古く, 孤独な自我の苦悩と喜びを扱う詩と, 耳を傾ける聞き手の汝をめざす詩の区別がある. 社会の中で笑いが生じるのであれば, 滑稽詩がどちらの部類に属するのか, その判断は容易である」(Hrg. v. Gernhardt, R. u. Zehrer, K. C.: Hell und Schnell, Frankfurt/M. 2004, S.11.)

(27) Ebd. S.28.

(28) Ebd. S.15.

(29) 世界保健機関編, 武田文和訳. 『がんの痛みからの解放』第２版.（東京：金原出版, 1996）

(30) Ebd. S.40f.

(31) Ebd. S.47.

(32) Ebd. S.54.

(33) Ebd. S.57.

(34) Ebd. S.61.

(35) Ebd. S.65.

(36) Ebd. S.63f.

(37) Haldane, J.B.S.: Cancer's a Funny Thing. http://www.oatbridge.co.uk/Haldane. htm

(38) Ebd. S.67f

(39) Ebd. S.14.

(40) http://e:wikipedia.org./wiki/Humor

(41) 例えば, 絵に関しては, ゲルンハルトの Hier spricht der Zeichner (Stuttgart, 2002) や Unsere Erde ist veilleicht ein Weibchen（München, 2001）を参照. 因みに後者ではリヒテンベルクの「市壁の堀には, 堅固さを増すためにワニを放ったらいい」の文にたいし, ゲルンハルトは上下対照的に, つまり下には曇りの日, 市壁から

思案げに眺めるリヒテンベルク，２本の材木と１個の樽が浮かぶ堀，堀端を通る旅人を描き，上には晴れの日，嬉々として喜ぶリヒテンベルク，２匹のワニと更にもう１匹の首を堀端へ持ち上げているワニ，驚く旅人を描いている．

(42)『ナイチンゲール著作集』第三巻（現代社, 127頁）

(43) スーザン・ソンタグ前掲書, 297頁